

「祈りとモダニティ」とはいかなる問題か？

芦名定道

< 内容 >

- (1) 問題
- (2) 祈りからモダニティへ
- (3) モダニティから祈りへ
- (4) 「祈りとモダニティ」とはいかなる問いか

(1) 問題

0 . 前置き (< 資料 > へ)

- 1 . 「祈り」と「モダニティ」という二つの事柄をつなぐことが難しい理由
 - ・ 祈りの「普遍性」に対するモダニティの「歴史的特殊性」(西欧 ?)
 - ・ 祈りにおける「個人」の比重とモダニティの「社会性」
- 2 . 第一回目の研究会を受けて、自分の関心から。
- 3 . 問題を二つの方向で考える。
 - 祈りからモダニティ / モダニティから祈り
 - その上で、モダニティにいかに対処するのか、モダニティの状況下での宗教の可能性について考える。

(2) 祈りからモダニティへ

- 4 . 有の祈り、無の祈り、生の祈り
 - 「絶対的なものへの志向性」
 - 人間の本性としての祈り、人間の本質的な可能性としての祈り
 - モダニティのもとでも、祈りはなくなる。しかし、その可能性がいかなる仕方
方で現実化するかが問題となる。
 - とくに、個人と社会、そして共同体との関連性が問題となる
- 5 . 植村正久 『真理一斑』(1884年)
 - 「人間は本性的に宗教的である」(『植村正久著作集 4』新教出版社、10頁)
 - 「人間は祈るところの動物なり」(115 頁)
 - 芦名定道 「植村正久とキリスト教弁証論の課題」、『アジア・キリスト教・
多元性』(現代キリスト教思想研究会) 第5号 1-22頁。

(3) モダニティから祈りへ

- 6 . いつから近代か、また近代はどのような段階を経て展開してきたか。
 - 古代 / 中世 / 近代といった時代区分は便利であるが、それ自体がルネサンス期の産物、

決して問題がないわけではない。

宗教（キリスト教）との関連から見て、近代・モダンに、17世紀中葉以前と以降での段階を設定し、また、19世紀の末以前と以降とを区分する。

7. 注意あるいは補足

モダンは、地域によって（17世紀中葉から18世紀にかけてイギリスで典型的に成立し、後にグローバル化によって世界規模で進展しつつある社会システム）また社会システムのどのサブシステム（科学・啓蒙的な実証主義的科学／資本主義・市場経済／民主主義・議会制、立憲制、信教の自由と政教分離）に注目するかで、その理解は異なってくる（進展の速度あるいは普遍化の条件の相違）。モダンとは伝統的・封建的な社会システムのシステム変動によって生成した社会システムの全体性。

8. 以上を念頭に置いた上で、モダニティの基本性格を制度的再帰性と考える（ギデンズ）。人間存在（精神、自己）の基本構造としての再帰性一般とモダニティの特徴としての制度的再帰性との相違。

アンソニー・ギデンズ

『モダニティと自己アイデンティティ 後期近代における自己と社会』

ハーベスト社

9. キルケゴール『死に至る病』（斎藤信治訳、岩波文庫）

「人間とは精神である。精神とは何であるか？ 精神とは自己である。自己とは何であるか？ 自己とは自己自身に関係するところの関係である、すなわち関係ということには関係が自己自身に関係するものになることが含まれている、それで自己とは単なる関係ではなしに、関係が自己自身に関係するというそのことである。」（20頁）、「関係がそれ自身に対して関係するということになれば、この関係こそは積極的な第三者なのであり、そしてこれが自己なのである。自己自身に関係するところのそのような関係、すなわち自己、は自分で措定したものであるか、それとも他者によって措定されたものであるかいずれかでなければならない」、「かかる派生的に措定された関係がすなわち人間の自己なのである」（21頁）。

「死に至る病とは絶望のことである」（第一編）、「絶望は罪である」（第二編）

10. 宗教との関わりで問題な制度的再帰性の特徴

懐疑の制度化（確実な知の解体）

内部準拠性によるシステムへの繰り込みとシステムの自己修正

社会システムの外部の問いの削除、伝統や権威の解体

11. 19世紀の宗教批判に典型的に見られるように、信仰はイデオロギー（アヘン）かユートピア（幼児性）かの二者択一にさらされることになる。

リクール「世俗化の解釈学 信仰、イデオロギー、ユートピア」

『解釈の革新』（久米博他訳）白水社。

芦名定道 「ティリッヒのユートピア論」、『ティリッヒ研究』（現代キリスト教思想研究会）第3号 73-82頁。

「2 意味世界とユートピア」「3 現代の宗教的状況と終末思想」、『キリスト教と現代 終末思想の歴史的展開』（小原克博共著）世界思想社、14-

35頁。

12. しかし、再帰性によって成立するシステムは、その変動（いわゆる限界状況、戦争や革命、そして死）において、外部の問い、システムの根拠づけ・正当化の問いにさらされるという危険（可能性）を除去することはできない。コントロールできないリスクの存在はモダニティへの正当性への問いを提起し続ける。モダニティにおける抑圧されたものの回帰、宗教は衰退しない。

安心・予測（未来の植民地化）を目ざしてきた再帰的なコントロール自体が、大きな不安定要因となる。それが生み出す不安な世界という予想外の事態。

伝統的宗教は、この不安に対する安心、実存的な確信をなおも与えるのか。

伝統的宗教は、根本的な懐疑にさらされているとすれば。

伝統的宗教の変革か、新しい形態の宗教の生成か。

13. 近代・モダニティは再帰的な未完のプロセスであり、モダニティから、それ以降は生じない（ポスト・モダンという逆説）。

(4) 「祈りとモダニティ」とはいかなる問いか

・モダニティが伝統的な宗教（祈り）にいかなる変化をもたらしたか。

「モダニティのもとでの祈りの現実化」の現象学

・伝統宗教にとってモダニティはどのように評価できるのか。いかにモダニティに対処すべきか（三つの可能性。完成、超克、回避）。モダニティが抑圧する道徳的実存的な問いに対して答える。

・モダニティはいかなる宗教的な可能性を秘めているのか。

現代のスピリチュアリティをめぐる問題は、この点に関わっているのか。

モダニティ自体が再帰性という構造を有していることから、そこにも一つの宗教性（広義の宗教、再帰的な社会システムの脱パラドックス化・根拠付けとしての宗教）を見いだすことができる（制度的再帰性も再帰性であるからには）。それに対して、伝統宗教は自らを変革しようと試みるか否か。

たとえば、近代の自然主義（内部準拠性における宗教性）に対するプロセス神学の対応。

<資料>

1. 研究プロジェクト 2007 「祈りとモダニティ 宗教から現代を考える」

「昨年までの研究プロジェクトでは、「変化する世界における宗教 相克と調和」というテーマのもと、宗教間対話の可能性などをめぐり、現代の宗教の諸問題について幅広く論議を重ねてきた。本年からは、問題連関をもう少し絞って「祈りとモダニティ」というテーマで、宗教が現代社会においてどのような可能性をもちうるのか、という観点から研究を進めていくことにする。本テーマでは、「祈り」が宗教の原点であるという基本認識に立ち、「祈り」の概念を、神仏への祈りのみならず、瞑想やあらゆる宗教的情感をも包括するという、できるだけ広い意味で使用している。

ところで、宗教とモダニティは古くて新しいテーマである。いわゆる近代は宗教批判としての啓蒙主義・科学主義によって推進され、宗教はその存亡の淵に立たされている、とい

う意味での宗教とモダニティの対立はむしろ古典的なテーマになった。しかし、今日の近代は、近代化の外部にあってその与件と考えられて来た宗教や家族といったあらゆる伝統や自然を自らの内部に取り込み、自らの依って立つ根拠それ自体を近代化する再帰的近代化、すなわちハイ・モダニティの時代に突入しているといえよう。この点で、宗教とモダニティの関係は、従来とは次元を異にする全く新たなテーマとなる。このような現代において宗教は何処へ行くのか、あるいは宗教の視点から現代はどのように見えるのか。これらが今後二年にわたって「祈りとモダニティ」というテーマの下で探究されるべき問題である。」

2. 第1回研究会(日 時:2007年3月23日(金) 18:00 ~ 20:00)

・落合仁司(同志社大学)「近代性に対する宗教性の三つの位相」

「再帰的近代性が近代性それ自体を対象化する近代性の位相であるならば、それは近代性を対象化する宗教性の位相と同相である。近代物理学をその推進力とする近代性に対して宗教は以下の三つの位相を取りうる。

1) 近代性をそれのみでは不完全な未完の可能性と捉えて、それを補完し完備化する補完宗教あるいは「近代の完成」の位相。

2) 近代性に挑戦する国民国家のナショナリズム、国家あるいは政治と一致する政治宗教あるいは「近代の超克」の位相。

3) 近代性において周縁化されることによってむしろ聖域化される神秘体験あるいは霊的な心理に依拠する心理宗教あるいは「近代の回避」の位相。

報告者は第一の補完宗教の可能性に期待する。たとえば落合仁司「無限、存在、他者 清沢満之と集合論」を参照。」

・棚次正和(京都府立医科大学)「祈りとモダニティ」についての一考察

「「祈り」を「宗教の原点」と捉える研究プロジェクトテーマの趣旨説明に則り、従来の「祈り」の概念を二重に拡張することを提案したい。というのも、欧米語の prayer, pri e, Gebet などと日本語の「いのり」とは、必ずしも対応していないからである。考察の際の導きの糸は、「祈りは人間の自然本性に由来する行為であり、状態である」ということと、また「祈りは宗教経験の原点をなす」ということである。第一の導きの糸からは、人間の自然本性を「絶対的なものを志向する」と捉えることにより、「祈る」と「生きる(=息をする)」こととの親密な結びつきが浮かび上がる。また、第二の導きの糸からは、宗教経験を「絶対との統一」の経験と捉えることで、相対(実存的自我)と絶対との関係に対する認識が覚醒や救済の経験となることが確認される。

まず、「祈り」や祈り関連の言葉、訳語の原語の語源探索を通して、多様な輪郭線を素描するとともに、そこに見出される共通の線分を整序すると、特定の対象への意識の方向づけや集中、そのための適切な手段の行使、聖なるものとの接触・交感やそこからの顕現などの諸契機が含まれていることが分かる。日本語の「いのり」の原義は、たぶん「い(神聖=生命力)」+「のり(宣り)」、すなわち「生宣り」であろう。こうした語源探索からのデッサンを下敷きにして、実存的な「自我」と「言葉」を目印に、祈りの現象を検討するならば、次の三局面が識別できると思われる。自我が人格の陶冶・錬成やその完成を目

指して人格的超越者と「我 - 汝」の関係に入る「有の祈り」、自我やそれに纏わる欲望や執着を放棄し、言葉も放棄して「無我・無心」の極みに開かれていく「無の祈り」、そして生命の本源から響きわたる「いのり（生宣り）」である。いずれも言葉の最後や言葉の母源として定型の祈り（聖句や聖音）が現われ、どの祈りも三局面を含むものと想定される。ここで問われるのは、我々自身の「祈り」理解が有する妥当性に他ならない。

もう一つの焦点「モダニティ」については、従来の歴史認識が人類史全体を俯瞰したものではないこと、近代欧米発の議論をそのまま現代日本に当てはめることの是非、現代を近代（モダニティ）との連続性において捉える見解がニューエイジの隠れた潮流を看過していることなどを指摘しておきたい。」

3 . 「キリスト教思想は現在大きな変動の中にある。パラダイム・チェンジ、「……中心主義」批判、脱構築、文脈化、小さな物語といったポストモダン的な現代思想の流行語はそのままキリスト教思想の流行語でもある。⁽¹⁾しかし、そこで真に問われているものはいったい何なのか。実を言えば、それはポストモダン神学の提唱者たちにおいても必ずしも明確ではなく、それだけ現代キリスト教思想は混沌としていると言うべきかもしれない。本書では、こうした問題状況自体を論じるのではなく、むしろそれに先だって、そもそもこうした状況が生み出され形成されるにいたった前史、つまり近代の形成期に焦点を当てることにしたい。なぜなら、ポストモダンが叫ばれるのは近代的システムの行き詰まりが意識されるからであるとしても、しかし近代というシステムを根本から問い直すことなしにその後に来るべきものについての有意味な議論は始まりようもないからである。今キリスト教思想に対して真に問われているのは、近代との関わり自体を根本から問い直すこと、つまり、キリスト教にとって近代とは何だったのかをその初期の状況に遡って議論することなのである。」

（芦名定道『自然神学再考 近代世界とキリスト教』晃洋書房 2007年、5頁）